

## 年頭所感



沖縄県医師会 会長 安里 哲好

明けましておめでとうございます。今年も会員の皆様にとって健やかで実り多い年でありませうよう祈念します。

2020年、中国武漢市で発生した新型コロナウイルス感染症(コロナ)は瞬く間に世界に拡大し、世界を震撼させ感染者数6.5億人(死者666万人)が発症しました。国内の感染者数は2,630万人余(死者:52,287人)、沖縄県は52.7万人余(死者:824人)でした(2022.12.15現在)。

沖縄県においては、昨年のコロナ第7波は感染力が強く、多くの医療従事者が感染し、救急外来・一般外来の制限、手術の延期や病棟閉鎖等の診療制限が生じました。コロナ感染者は県過去最高6,180人/日(週平均5,020人/日、2022.8.3)で5ヶ月間全国ワーストでした。特に小児の感染が多く、夜間や祝祭日の救急外来受診が過剰になり、救急医療が逼迫しました。また、高齢者施設の大規模クラスター発生頻度がとても多く、初期介入やその後の施設支援に難渋しました。沖縄県医師会は、濃厚接触者PCR陽性者及び自己チェック抗原陽性者の健康管理支援(5.2万人余)や土日・祝祭日の救急外来を緩和するため発熱軽症者抗原検査センターを立ち上げました。その後コロナ感染者は76人/日(週平均243人/日、2022.10.24)まで収束しました。その大きな要因は、多くの感染者・不顕性感染者(コロナ抗体保有率46.6%)そしてワクチン接種(3回目接種率49.5%、4回目接種率18.9%、2022.10.24)の結果だと思われます。その結果として、全国最下位が1ヶ月半近く持続しています。

1万人規模のエイサー踊り隊や沖縄全島エイサーまつり、4千人規模の世界空手大会、3千余

人(観客数万人)の那覇大綱挽きまつり、24万人余の参加があった沖縄の産業まつり、天皇・皇后両陛下ご臨席下の国民文化祭、首里城正殿の起工式(自見はな子内閣府大臣政務官・沖縄担当も同席)、7千人規模の世界ウチナーンチュ大会、3千人規模の全国自治体病院学会、そして1万2千人参加のNAHAマラソン等が開催され、加えて空港が雑踏し、国際通りも人が増え賑わいを見せ、人の流れが著しく増加しコロナの再熱を強く懸念するも、感染者数は増加傾向にあるが、今もなお全国最下位の状況が継続しています。今後は大きな変異株さえ出現しなければ、オミクロン対応ワクチン接種率(発症予防効果71%)を上げて(特に医療従事者と高齢者:80%と70%以上)、オミクロンに対する効果的な内服薬が診療所でも容易に使用できるようになれば、季節性インフルエンザに近づくと考えられます。コロナが発生し満3年となり、弱毒化し感染力が低下し、季節性インフルエンザに類似して行くことを強く願います(歴史的にはそのような経過を繰り返している様に思われます)。

今年は、コロナ第8波対策に加え、「県民と共に歩む医師会」、「地域医療の更なる充実」、「魅力ある医師会づくり」の三本柱を掲げ邁進して行きたいと思えます。コロナ禍の3年間で、働き盛り世代の健康状態の動向が危惧されるところで、早急に分析し(2015年と2020年対比)対策を練る必要が有ります。働き盛り世代の健康づくりの中心的役割を担う産業医部会の活性化や5社協議(沖縄県・沖縄労働局・沖縄県医師会・全国健康保険協会沖縄支部・沖縄産業保健総合支援センター)を継続強化し、具体的な実践計画を進めたいものです。「がん対策基本法」に

対して「脳卒中循環器病対策基本法」が2019年12月施行、それに基づいて「沖縄県循環器病対策推進計画」が2022年3月に策定されました。働き盛り世代死因の1位は高血圧関連疾患（3位は大腸がん）、循環器病対策推進計画をフォローの風とし、高血圧関連疾患の対策を喫緊の課題として推進して行きたいものです。

勤務医部会や女性医部会と連携し若き医師たちを医師会活動への参加を促し、入会率を上げるための「組織強化委員会」を立ち上げたいと思います。

警察医部会と県警との協力の下に「医療従事者の安全を検討する県医師会内委員会」を設置し、諸問題を取り上げ、可能な限り適切な対応をしていきたいものです。

一方、医療制度を鑑み、第8次医療計画、介護保険事業計画、地域医療構想、外来機能報告制度、医師の地域偏在・診療科偏在、医師の働き方改革、そしてかかりつけ医機能定義の法定化（機能報告制度と医療機能情報提供制度の拡充）等に具体的に関わると同時に、対策の推移を注視して行きたい。

救急搬送件数（1施設あたり全国1.9倍）及び時間外の救急外来受診件数（全国3.1倍）を是正するため、適正な救急外来受診を県民・地域住民に訴えて行きたいと思います。

沖縄県で今後強化される必要がある領域は在宅医療の充実と介護（介護施設等）との連携及び離島診療所の医師確保です。診療所が少ない（中部医療圏43.8施設／全国77.2施設／10万人）背景で、どの様に在宅医療を展開するか、病院に在宅医療部門の設置や在宅医療を専門とする診療所を拡大して行くか、加えて訪問看護ステーションとの連携を強化して行くかは大きな課題です。離島診療所医師確保に関しては、県立中部病院における総合診療科の充実、自治体病院との連携に加え、琉大病院地域枠（後期研修修了者18名）の効果的活用が望まれます。

今年から数年は基幹病院の新病院建設ラッシュです。開院予定は、浦添総合病院(2023.12)、

琉球大学病院(2025.1)、那覇市立病院(2025.10)、公立沖縄北部医療センター(2026)等の救急医療や高度医療の中核となる病院の新築拡大で、地域医療の充実に大きく寄与する事を期待しています。特に琉球大学病院は広大な土地・良好な景観の環境の中で、高度先端医療、県下レベルの地域医療・救急医療や離島へき地医療の向上に寄与するのみならず、東南アジアの医療に貢献して頂き、また、医療国際部を充実させ、DXでの東南アジアにおける国際保健・医療連携を推進し、日本にいや東南アジアに琉大病院ありと評価されるよう大きく羽ばたいて欲しいものです。一方、昨年許認可された地域包括ケア病棟（428床）の活用や県立精和病院統合の方向性とその役割が協議されています。

次年度は、沖縄県医療の近未来像（医療のグランドデザイン）を構築するための委員会を設置したいものです。幸いにして、上記の基幹病院が整えば、①離島診療所医師確保、②在宅医療と介護の連携、③働き盛り世代の健康づくりを通じての健康長寿復活、④新興感染症対策、⑤医療DXを用いた地域連携（北部医療圏にて1患者・1ID・1カルテのモデル地域推進に期待）等であろう。無論、初期研修医や専攻医の育成および確保はとても重要な課題で、全県医療界を上げて取り組んでいきたいと思っています。

今年も会内外の諸課題に対して、執行部・事務局一同一丸となって進んで行きたいと思っています。会員の皆様のご支援ご指導よろしくお願い致します。

令和の時代は、東アジアの平和を強く希求したい、特に台湾海峡の平穏を祈念します。台中市医師会とは20年来の交流があり、また2021年第121回九州医師会総会・医学会において、台湾医師公会全国聯合会理事長邱泰源先生に素晴らしいご講演も頂きました。

沖縄は数百年・数千年来澄み切った青い空と七色に変化する海は永久に美しくあって欲しいし、加えて「平和の島」と「長寿の島」を切望します。